

《ロシア語のことわざ》(その2) —歴史的・社会的・文化的背景から眺めた—

齋藤 裕

キーワード

ロシア (Russia), ことわざ (proverbs, sayings), ロシアの歴史

はじめに

ロシアの民族学者ウラヂミール・ダーリ (1801-72) は最初の本格的なロシア語辞典(「ダーリの辞典」)の執筆者として有名ですが、かれの編集になる『ロシア民衆のことわざ』(1862)には自らの手で収集したロシア語の俚諺^{りげん}、慣用句の類が延々と三万余りにわたって記載されています。巻頭を飾っているのは「神・信仰」の部類に収められた〈生きるとは神に仕えること〉Жить—служить богу. ということわざです。

ここでは専門的な立場を離れて、いわゆる俚諺 пословица 〈パスローヴィツァ〉、慣用句 поговóрка 〈パガヴォールカ〉、格言・名句・金言 крылатые слова 〈クリラツティエ・スラヴァー〉などを総称して、大雑把に「ことわざ」と呼ぶことにしましょう。

ちなみに著者としてはパスローヴィツァに狭義の「ことわざ」を、パガヴォールカに「言い習わし」という訳語をあてたいと思います。

この小論にはそれら膨大な数の「ことわざ」の中からロシア内外の数種の資料を比較考量して、とりあえず、見出しとしてロシアの民衆にとくに親しまれ、よく引用されるもの(A)、ことにロシアの風俗や習慣に根ざしたもの(B)、世界と共通するような、また外国に起源を持つもの(C)などを占めて30種だけ選りすぐりました。その他に説明文の中で引用したものを含めると100を優に超えることになるでしょう。

今日のロシアで通用している「ことわざ」の数は、ざっと見積もって1000~2500だと言われています。もとよりここに挙げられている文句は全体からすれば微々たるものですが、それでも「ロシアのことわざ」の精華を洩らさないように努めました。

これらの「ことわざ」にはロシア語の原文を載せるとともに、忠実かつ平明な和訳と、

ほぼ対応する「日本のことわざ」とを併記しました。この部分には新しい説もいくつかうち出してあります。

これまで日本では、日本をはじめ「世界のことわざ」を扱った本が次から次へと、実用的なものからエッセイ風なもの、さらに専門書にいたるまで、おびただしく出版されています。それでも、いざ「ロシアのことわざ」となると、それを正面から扱った書物は、妙なことに、数えるほどしかありません。多くの場合世界のことわざの一部として紹介されているに過ぎません。まれにロシア語が引用されていても、もっぱらことわざの大意や民俗的な内容が中心になっており、ロシア語の文章の文法や用法に関する説明が手薄であることは否めません。

そこで今回の試みでは「ロシア語のことわざ」という点を何よりも重視する方針を立てました。取り上げたことわざには、上述のように、まずロシア語原文を載せ、それに和訳と日本のことわざを併記してあります。さらに、それらの例文一つ一つに、その成り立ち、言語表現から思想内容、歴史的・民俗的背景にいたるまでかなりくわしい注釈や説明をつけるように心がけました。

この論考をまとめるに際して、もちろん優れた各種の露和辞典の恩恵にあずかりました。しかしながら辞書にはスペース上の制約もあり、ロシア語本文の異同（ヴァリエント）の検討や英語・独語・仏語その他の言語のことわざとの比較までは望めません。控えめながら、そんな点に留意したのもこの小論の特色の一つといえるかもしれません。

おのおのの国のことわざを扱った文章は、えてしてお国自慢や手前味噌になりがちですが、ロシアの文化や社会をふり返れば、ロシア国民文学の祖とされる文豪プーシキン の作品や伝記を繙くまでもなく、歴史的に西欧の諸国と深い関係にあったことは無視するわけにはいきません。そうした点でことわざの成立や発展には、一部の聖職者や貴族の活動もかなり与っていたと考えていいでしょう。

一般に「ことわざ」はその民族の知恵と経験を凝縮したものにほかなりませんが、他方で「ことば」の表現としてみると、とくに民衆の口承文芸の宝庫であり、延いては一国の文学表現の母体であるといってもあながち過言ではないでしょう。

その内容の点では、19世紀の後半でも民衆すなわち農民であったというお国振りを反映して、「ロシアのことわざ」は誰よりも農民のものの見方、感じ方から生まれ、また逆にそれらを如実に表わしている点に大きな特徴があります。

広漠たる空間、厳寒の自然、苛烈な政治支配のもとで一日一日をたくましく、しぶとく、しかも楽天的に生き抜いてきた百姓（ムジーク）たちの喜怒哀楽の感情が、ことに「呻きや叫び」（ダーリ）が、それらのことわざには息づいていると言われるゆえんです。そこには農民らしい素朴さや土臭さが充満しています

どの民族の「ことわざ」であれ、その形式、修辞の面の特徴として、頭韻、脚韻などの韻、比喩的な文章、対句的・対照的表現、また簡潔的な文体といった特色がよく指摘

されますが、ロシア語のことわざにしてもその例にはずれるものではありません。

しばしば韻を踏み、みごとな旋律を響かせ、きびきびした短文に結実したロシアのことわざは、悠久の昔から民衆の生活の中に口承文芸として生まれ、育まれてきました。それらの「ことわざ」は繰り返して、口ずから語られ、耳で聞いて、人から人へと、土地から土地へ、時代から時代へと受け継がれてきたものです。

こうして民衆を中心に磨き上げられてきた「ことわざ」の数々は、ロシアの民衆の息吹に触れ、文化の土壌としての民間伝承（フォークロア）を解明する上でも貴重な遺産ですが、わたしたちがロシア語に習熟し、ロシア文学を味読しようとする場合にも、かけがえのない宝物であると言えます。

語学の観点からすると「ことわざ」は古い単語や俗語的表現をとくに含んでいて、とっつきにくい点もあるので、見出しとしてかかげた「ロシア語のことわざ」にはすべて、また本文でも適宜カタカナ表記を付すとともに、ロシア語の語彙や用法には、かゆい所に手が届くような懇切丁寧な解説を試みました。

ともあれ、短くて語呂のよいことわざは覚えやすさが身上ですから、語学の学習として暗誦するにはそれこそうってつけといえるでしょう。「ことわざ」は覚えるだけでも楽しいものです。

本文の解説については、語学的な気配りはむろんのこと、それ以外にも民俗的背景や関連事項にも一歩踏み込んだ説明を加え、時にはかなり高度なものも交えてみました。

ですから歴史などに関心を抱いている方々にもきっと参考になるだろうと思います。

2008年11月

齋藤 裕

「参考文献」

この小論は次に挙げる参考文献に極めて多くのものを負っている。本来なら本文の中で文献の該当箇所をいちいち明示すべきところだが、これはもとより専門的な論文ではなく、一般向けの読みやすい文章を意図したものであるので、失礼ながらここに一括して、これらの編著者に対する著者の深い感謝の念を表わしておくことにする。よろしく了解していただきたい。

『研究社露和辞典』東郷正延他編，1988.

『ドイツ語ことわざ辞典』山川丈平編，白水社，1975.

『フランス故事ことわざ辞典』田辺貞之助編，白水社，1976.

『博友社ロシア語辞典』木村彰一他編，1975.

『コンサイス露和辞典』井桁貞義編，2003.

『パスポート初級露和辞典』米重文樹編，白水社，1997.

- 『岩波ロシア語辞典』和久利誓一編, 1992.
- 『ウシャコフ詳解露露辞典』五月書房版 (1953).
- 『オジェゴフ露露辞典』(3版) 1963.
- 『ロパーチン詳解露露辞典』(3版) 1994.
- 『ジューコフことわざ辞典』ЖУКОВ. В. П. 1966 / (13版) 2007.
- 『ポタポフ家の陽気な人々』米原万里著 (NHKテレビ ロシア語会話テキスト: 1997-8)
- 『ロシアの言語と文化』戸辺又方著, ナウカ, 1996.
- 『ロシアのフォークロア』フョードル・セリバーノフ編著, 金本源之助訳, ナウカ, 1998.
- 『モスクワ』木村浩著, 講談社, 1992.
- 『亡命ロシアの料理』ピョートル・ワイリンドル・ゲニス著, 沼野充義訳, 未知谷, 1996.
- 『本のための生涯』イワン・スーチン著, 松下裕訳, 図書出版社, 1991.
- 『世界の故事・名言・ことわざ』(「ロシアのことわざ」江川卓) 自由国民社, 2003.
- 『ロシア文法』八杉貞利/木村彰一著, 岩波書店, 1968.
- 『スラヴのことわざ』栗原成郎著, ナウカ, 1989.
- 『ドイツ・西欧・ことわざ・名句小辞典』下宮忠雄編著, 同学社, 1994.
- 『ことわざで英語を学ぶ』奥津文夫著, 三修社, 2008.
- 『酔いどれロシア』A. ジノビエフ作, 川崎浹訳, 岩波書店, 1991.
- 『ロシア語のすすめ』東郷正延著, 講談社現代新書, 1986.
- 『ロシア文法の要点』原求作著, 水声社, 1996.
- 『ロシア』原卓也監修, 新潮社, 1994.
- 『ロシア・ソビエトハンドブック』東郷正延他編, 三省堂, 1978.
- 『まるごと覚えようNHKスタンダード40ロシア語』亀山郁夫著, NHK, 2000.
- 『NHK気軽に学ぶロシア語』沼野充義, NHK, 1993.

11 Москва слезам не верит. [A]

マスケー スリザーム ニ ヴィエーリット

《モスクワは涙を信じない》

泣いたとてどうなるものでなし。いくら涙を流しても同情されず, いくら嘆いても援助が得られないときにいう。

このなかなか厳しい内容のことわざが生まれたのは, 今から450年あまり前の頃とされている。イワン4世(雷帝)が大貴族たちを弾圧し, モスクワ中心の強力な統一国家を作り上げた政治状況が背景になっている。このことわざはそのまま, ソ連映画の題名にもなった。古代から現代にいたる, ソヴィエト・ロシアの政治的苛烈さの伝統をずば

りと表現して余すところがない。

Вéрить (信じる) という動詞は対象として与格 (人やこと) をとる, ただ Я не вéрю ей. という場合《彼女を信用しない》というより《彼女のいうこと [на слóво] を信じていない》と訳したほうが適切なことがある。Понýть (分かる・理解する) も同様。Вы пóняли мeня? (私の言うことがわかりましたか?) また《в + 対格》となると《力や可能性》を信じるという意味になる。

これらの用法はだいたい英語の《believe》(in) と共通するようだ。

◎ Вы вéрите в Бóга?

(あなたは神 [の存在するの] を信じますか?)

◎ Слезáми горе не помóжешь.

(涙で悲しみは癒せぬ／いくら泣いても悲しみを癒す術はない)

モスクワは、ロシア語ではマスクワーと発音する。ちなみに英語では Moscow モスコーとなる。アクセントが移るので注意されたい。日本語のモスクワでは、例によって平板なアクセントになる。

「赤の広場」「モスクワ大学」「クレムリン」「トレチャコフ画廊」「ボリショイ劇場」などで有名なモスクワはロシア人にとって「大きな村」のごとき存在で、いわば《心のふるさと》として特別の愛着を感じる町であった。

プーシキン代表作の中で「モスクワよ。この一言の響きのうちに、ロシア人の心にとってどれほど多くの思いがこめられていることか！ どれほど多くの思いが鳴り響いていることか！」(『エヴゲーニイ・オネーギン』) と述べている。ことわざであれこれと取り上げられているのもそのためである。

とりわけ「赤の広場」Крáсная плóщадь は「クレムリン」と不可分であって、千年以上も前からさまざまな歴史的事件の舞台となった。Крáсная は本来「美しい」を意味する古語である。ここでは華やかな儀式や軍事パレードも繰り広げられ、叛乱や虐殺といった血なまぐさい出来事も起きた。隣接するクレムリンはツァーリの時代から、社会主義に入っても政治の中枢の象徴であることをやめなかった。「せめて一生に一度はモスクワに行ってみたい」というのが、昔から地方に住むロシア人の偽らざる願いであったようだ。

ゴーゴリはペテルブルグと対比して、モスクワの特徴をさすがにうまく捕らえている。「モスクワは人嫌いなおばあちゃんだ。ブリヌイを焼き、ほんやり遠くを見つめ、自分のソファでゆったりと世間話にうなずきながら耳を傾けている」

次のことわざは「ローマは一日にしてならず」[Rome was not built in a day.] と同工異曲であるが、ロシアではしばしば引用される。フランス語のことわざではモスクワがパリに変わることを言うまでもない。

◎ Москва не сразу встро́ила.

モスクワは一挙に建設されしにあらず。大きな仕事は手間ひまがかかるもの。また転じて、「大器晩成」というニュアンスで用いることもある。さらに、期限が来たときに、「もう少し時間を貸してくれ」という言い訳にも使われたりする。このように、ことわざは状況に応じていわばカメレオンのように意味を変えるので、案外やっかいな存在である。

一般に、ことわざは使われる状況に応じて、その場その場によって、微妙に意味合いを変えるのがふつうである。

セリバーノフは「諺や慣用句は多くの場合、転義した形で用いられる」として、「滑るのが好きなら、そりを運び上げるのも好きになれ」を例にとり、こう述べている。「こういった言葉で実際に、滑るのは大好きだが、そりを運ぶのを嫌う子供をしかることができる。しかし、この諺は、ほかの状況でもいろいろ使える。(たとえば、いたずらをして、注意されるのをいやがる者に対しても。)」これは上述したように、ことわざの臨機応変の応用例とみなすべきであって、《転義》と呼ぶにはふさわしくない。ことわざのいわゆる「転義」的な意味は、これと別の性格を持つので、他の場所で説明することにした。

なお一時、ゴルバチョフのもとで《Гласность グラスノス》(情報公開)とともにソ連を風靡した(1985-91)ことは《перестро́йка ペレストロイカ》(改革)はもともと《перестро́ить》(建て直す、変更)から来ている。それからソ連が崩壊してエリツィンが、ついで新生ロシアが誕生して、目下プーチンが権力を全面的に掌握している。これらの社会の大激動のさなか《改革》の掛け声もいつしか聞かれなくなった。

12 Язы́к мой——враг мой. [B]

イズィーク モイ ヴラーク モイ

《わが舌は一わが敵》《口は災いの門》

язы́к 「舌」→「ことば」→「言語」。この「ыウイ」の発音は初めのうちは難物であるが、「西瓜(スイカ)」の「イ」と覚えるといつのまにか身につくもの。もちろん《私の言葉はわたしの敵》と訳してもいい。なおこの横線(dash ダッシュ・ダーシ・横線)は「тиреチレー」と言い、フランス語の「tirer 引く」から来ている。A=Bの形の文にあって、主語(A)、述語(B)がいずれも名詞(代名詞でなく)の場合、文の意味がまぎれないように、これを使用するわけである。быть [ある(=)の現在есть] はふつう定義などでしか使われない。

例えば, Знание—сила. (知は力なり) / Петро́в—студе́нт. (ペトロフは学生です)。
ただし Распу́тин не писа́л. (ラスプーチンは書かなかった) / Та́ня—ру́сская. (ロシア人,

名詞) (ターニャはロシア人です) ただし *Девушка красивая*. (美しい, 形容詞) その娘は美しい) *Гоголь не пианист*. (否定詞 *не* があれば横線は不要)

このことわざはじつに語呂がいいが、それは短いものの弱強格 (ямб) で、「ク」の繰り返し、さらに *мой* モイの繰り返しに耳に快く響くからだ。ここで日本語の句読点に類した用語をまとめておこう。類書ではこうした説明はあまり見かけないが、こういうことは知っておくと、なにかと便利なものである。

「.」 「точка トーチカ」 (終止符 = ピリオドに相当)。ちなみに「トーチカ」は地点・時点・限界点など、一般に「点」を表わすが、軍事用語では特別に「火点」 (機関銃などの自動火器を主体とする戦場の陣地) を意味した。日本でも、戦後しばらくの間「トーチカ」なることばをよく見聞きしたものである。

「:」 「две точки」 (コロン)

「;」 「точка с запятой」 (セミコロン)

「,」 「запятая」 (読点 = コンマ)

「A」 「ударение ウダリエーニエ」 (力点) 英語のアクセントに当たる。

「!」 「восклицательный знак」 感嘆符。

「?」 「вопросительный знак」 疑問符。

「знак ズナーク」 は一般に「記号・符号・標識・兆候・信号」など、要するに「しるし」を意味する。

13 Без труда не вынешь рыбку из пруда [B]

ビス トルダー ニ ヴィネシ ルイブク イス プルダ

これも《普遍人称文》。一般的に言えるようなことがらを表わす。

苦労しなけりゃ、小魚一匹だって池から取り出せっこない。

◎ На безрыбье и рак рыба.

魚のいないところではザリガニも魚。すぐれた者がいなければ、いる人で間に合わせるよりない。《鳥なき里のコウモリ》

ロシアには *Волга матушка* 母なるヴォルガ (ヨーロッパ最長。3530km) や *Дон батюшка* 父なるドニエプルを初めとした悠々たる大河 *река* を有することもある。人々の生活と川との結びつきも深く広いから、川にちなんだことわざも数多く見受けられる。ここでは魚を中心にして、いくつか挙げてみよう。あらかた魚は肯定的なものとして出てくる。

◎ *Волга впадает в Каспийское море*.

ヴォルガ川はカスピ海に注ぐ。しごく当たり前のことだ。転じて《ばかばかしいこと言うな》

◎ Ры́ба с головы́ гниёт.

魚は頭から腐る。組織の腐敗は上から起こるもの。

◎ Хороша́ ры́бка на чужо́м блю́де.

他人の皿の魚は良く見える。

◎ Ли́бо ры́бку съе́сть, ли́бо на мель се́сть.

魚を食べるか、浅瀬に乗り上げるか。

伸るか反るか。一か八か。

◎ Лу́чше ма́ленькая ры́бка чем большо́й тарака́н.

大きなゴキブリより小さな魚。

◎ Не учи́ ры́бу пла́вать.

魚に泳ぎを教えるべからず。

◎ На то и щу́ка в мо́ре, что́бы кара́сь не дрема́л.

恐ろしいカマスが海にいるのは鮒が居眠りしないため。油断大敵。というっかりして他人に騙されたりした相手などにいう。転じて「人付き合いは避けられぬもの」ぐらいの意味にも用いられる。

14 Волко́в (Медве́дя) бо́яться—в лес не ходи́ть. [B]

ヴァルコフ (ミドヴァイェヂヤ) バヤツツァ ヴリエス ニ ハヂーチ

この文はいわゆる《不定法文》である。動詞は無変化(原形)で、主語がない。動作の主体は無人称文と同じく与格に置かれる。強い命令やアピールを表わす。

《НЕ КУРИ́ТЬ 禁煙》／ Бежа́ть! (走れ)／ Что де́лать? (何をなすべきか?)

狼(熊)が恐れれば、森へ行くなかれ。《虎穴入らずんば、虎児を得ず》

目の前の困難を恐れていては成功はおぼつかない。失敗の危険のある仕事にとりかかるときに、相手を元気づけることばとして用いる。森にまつわることわざは沢山ある。

◎ Чем бо́льше, тем лу́чше.

多ければ多いほど良い。

◎ Чем да́льше в лес, тем бо́льше дров

森の奥へ入り込むほどに薪(たきぎ)もますます多くなる。

《Чем ～》は「～よりも」を表わす比較表現だが、《чем ～, тем —》の形で比較級と用いて、「～であればあるほど、それだけ—」という意味になる。

ほとんどの辞書や参考書は、このことわざを「事態が進展するにつれて、予期せぬ困難や問題が生じる」という意味だと解している(『岩波ロシア語辞典』／戸辺又方『ロシアの言語と文化』その他)。一方、「先に行けばいくほど、成果も多くなる」(甲)(『研究社露和辞典』)もっとも「前途ますます多難」という意義も載せている。／「虎穴に入ら

ずんば虎兇を得ず」『博友社ロシア語辞典』旧版)と解釈する立場は少数である。これらは一見してほとんど反対の意味であるのに、どうしてこんなことが起こったのか。はたしてどちらが正しいのだろうか。少し踏み込んで考察してみたい。

問題は《薪》をどう位置づけるかにかかっている。少しだけ遠回りして、スラヴ人の生活にとって、歴史的・社会的に森林や薪がどんな意味を担っていたのかを見てみよう。

古代からのスラヴ人やゲルマン人の生活の舞台となっていたのは、豊かな森林と大きな河川の控えている、果てしのない広大な平原であった。よく「ロシアには森が多い」といわれるが、たしかにロシア人は「森の民」と呼ばれるにふさわしい。

とりわけ森林は農民や狩人の日々の暮らしと密接な関係を持っていた。ロシアやドイツのことわざには森にまつわるものがことのほか多いのもっともである。

森や林は熊や狼や森の精のうろつく恐ろしい場所、自然の天変地異の危険に充ちた所であった。「森の中を歩くことは鼻先に死を見ること」(ロシア)ということわざも残っている。「木に打ち倒されたり、熊に引き裂かれたり」(ダーリの注)するからである。

ことに「狼」は人や家畜などを襲い、農民の生活に深刻な被害を及ぼすものとして、農村で最も恐れられていたという。

他方で、森や林はかれら百姓(мужик)の生活維持に必要な食用としての木の实、きのこ、野生の野菜、また雨露を凌ぎ、厳しい寒冷に耐える住居用の木材、現在でも防寒に不可欠な動物の皮革など多くのものを蔵する天然の宝庫であったといっている。これらの中に《дрова́》(複数)(たきぎ)も含まれていたのである。

「森に生じるものは家の中で役に立つ」(白ロシア)

従って、《лес》(森林)というのは、人々にとって天然の危険と恩恵が隣り合わせに存在するような生活空間であった。自然の恵みをつかむには危険を冒さなければならない。狼を恐がって森へ足を踏みこまなければ、なんとしても生活が立ち行かないのだ。

こう見てくると、このことわざの《дрова́》(まき、たきぎ、そだ)はもともととは生活に役立つ、便利品という意味をもっていたと解釈すべきであろう。冬場の室内の暖房に欠かせぬ「たきぎ」であり、料理の煮炊きに必要な「そだ」であった。

◎「森へ行って来なければ、家で凍え死ぬことになる」(ロシア)

◎бро́сить дрова́ в печь(薪をペチカ・ストーヴにくべる)というのは、ごく最近までロシアの農村ではごくありふれた情景であったと思われる。

明らかに дрова́ は農民にとって有用なもの、好ましいものだったのである。

その傍証として、このことわざに類した二、三のことわざを追加して引用したい。

◎Бо́яться болко́в—бы́ть без грибо́в.

狼が恐れりゃ、キノコにはありつけぬ。(ウクライナのことわざ)

「身の安全ばかり考えていたのでは何も手に入らない。森は狼や熊のいるくらい恐ろしい場所だったが、一方人間の暮らしに必要な多くのものを与えてくれる所でもあった。

だから狼を恐れて森へ行かないと生活に差し支える。『森の奥へいくほどそだが多い』のだ。」「(『ウクライナのことわざ』 渡辺節子／『世界ことわざ大事典』 大修館書店)

上のことわざにある「キノコ」を「たきぎ」に置き換えることが可能であるのはいうまでもない。

◎ В лес дров не вóзят, в колоде́ц воды́ не лью́т.

森にはたきぎを運ばず、井戸には水を注ぎ込まぬもの。「骨折り損」「蛇足」の意味。
森：たきぎ = 井戸：水という関係で、「たきぎ」も「水」もプラスの価値を持っている。

◎ Лёсом шёл а дров не нашёл.

森を歩いても、そだが目に入らない。

《灯台下暗し》(ザルービン『露和辞典』)。身近なことは却ってわかりにくい。

ここでも「そだ」が森と結びついてプラスの価値で捉えられているのは疑えない。

森にはたくさん「たきぎ」があるもの、暖房や料理など生活に大切な「そだ」を取るために森へ入ることが当たり前であることが、これらのことわざの背景としてある。

つまるところ、問題のことわざは本来「先に行けばいくほど(そのぶん危険も増すが)、成果も多くなる」(甲)という意味であったとみなしてよいだろう。つまり「虎穴に入らずんば虎児を得ず」に通じるものであったと推定される。

しかしながら、他方で、現今ではこのことわざがもっぱら「なにかに深入りすればするほど、さらに大きな問題が出てくる」といった意味(乙)で広く使われていることもまたどうも否みがたい。ジューコフの『ことわざ辞典』にはこのことわざの用例(18世紀以来の文学から)をいくつか載せているが、こちらの意味だけしか挙げていない。

Чем дальше развиваются обьития, тем больше возникает трудностей, неожиданностей осложнений, из которых нелегко найти выход.

(どうやら、日本の辞書類の解釈はいずれもこれを典拠にしているらしい。)

結局、このことわざは古くは(甲)の意味であったが、いつしか(乙)という解釈が出てきて、むしろ前者に取って代わってしまったと考えられる。この(甲)から(乙)への意義の変化を《転義》とみなすことは妥当ではない。むしろ《転換》というべきであろう。何らかの理由・事情によって、ことわざの本来の意味が反転して、別のむしろ反対の意義を持つにいたったのではあるまいか。

こうした例としては、英語のことわざ A rolling stone gathers no moss. (転石苔を生ぜず)が挙げられる。よく知られているように、このことわざは、もとは日本の「石の上にも三年」と同様に、《何でも腰を落ち着けてやらねば(仕事も、お金も、愛情も)身につかない》というほどの意味だったが、後代になって米国に入るや、いつしか《絶えず活動している人はさびつかない、時代に後れない》という、ほとんど原義と反対の意味にも用いられるようになった。社会や時代の違いによって「苔 moss」のイメージが正から負へと転換してしまったのである。それでも、かりに将来新しい意味が大勢を

占めるようになったとしても、かつてこのことわざが古い意味をもっていたという歴史を否定することはできない。それを生み出した生活や感情を生きていた人々の存在を無視するわけにはいかない。新旧二者は互いに異なる文化であり、異なる暮らしぶりなのである。

日本のことわざで言えば「犬も歩けば棒にあたる」や「情けは人のためならず」などについても同様の事情があるのはごぞんじの通り。

さて、ここで《転義》について少し触れることにしたい。

◎ Лес рубят — щепки летят.

木を切れば木っ端は飛ぶもの。

このことわざはいつでも原義を離れて、自然な連想に従って、比喩的にしかも決まった意味（「大きな仕事に犠牲はつきもの」）で用いられる。このような例については《転義》とみなすことができる。この場合、意味は比較的安定していて、状況によってあれこれ動くというわけではない。またここには意味の反転も認められない。

さて、問題のことわざの意味の変化の経緯や理由はさだかではないが、おそらく、もともと農民の生活にねざしたと考えられるこのことわざが、時の移り変わりとともに（おそらく18世紀をそれほど遡らないころに）、一部の知識人・文学者の注目するところとなり、それとともに農民の生活と不可分の意味合いが忘れられ、庶民の生活感情から遊離して、本来の意義とは異なった新しい意味を担うようになったのではあるまいか。

それでも現実の農村では、また農民たちの間では、相当長い間、本来の意味（甲）でこのことわざが用いられていたと推測してもよからう。19世紀末から20世紀に入って、ロシアの社会にも近代化の大きな波が押し寄せてくることになる。それにつれて、森林の景観もしだいに大きく変貌を遂げ、やがて社会主義の集団化によって古来の農民の生活の仕方まで根底から変化を強いられるに至る。たきぎや枯れ枝も石炭へ、ガスへ、電気へと移り変わり、ペチカもストーヴへと新しく様変わりする。かくて、現代のロシアではことわざの古来の意味（甲）はひょっと絶滅に瀕しているのかもしれない。

とはいうものの、生活様式や生活感情の移行や変化がすべて一様に、また一挙になされるわけではない。とにかく広大で奥深いロシアのことであるから、地方、階級、民族、年齢、生き方によって、昔ながらの生活様式や古風な感情、考え方が残っていないとはいえない。

そもそも人間の思想やことばのような精神的文化は、その性質からいって、良かれ悪しかれ、どんな社会や時代でも、いわば絶えず後ろを見ながら、前へと進んでいくものである。

たとえば文芸においては、ことに伝統的な民話やことわざの分野では、古風なものが意外なほど根強く生きていることは、われわれが注意深く見聞きすれば、しばしば経験することであり、また、それが物質文明の進化・技術の進歩と異なって、精神文化の一

つの特徴であり、存在価値なのではあるまいか。

一例を挙げよう。「冬の森」「人里はなれた森の奥の空」を舞台にしたマルシャークの作品『12の月の物語』(1943-52)の中で、主人公であるみなしごの娘はママ母から「枯れ枝ひろいと、薪(たきぎ)あつめ」を言いつかって、「町はずれの小さな家」を後にして、雪の降りしきる森の中へ入って行く。家では「ペチカが赤あかと燃えている」。

民話を題材に取ったこの戯曲(「旧題:スラヴ物語」)が初めて書き上げられたのは1943年のことであるが、この舞台の時空のうちでは、いまだに昔ながらの農民の暮らしぶりや生活感情がたしかに生きているといえよう。あえて言えば、ここには古いもの、滅びたものを見出し、その生命を甦らせるだけの力があるということだ。

とはいえ、目下のところ、21世紀の新生ロシアが、革命前の古きよきロシアの伝統をよく受け継いでいるとも、また甦らせているともどうもいえそうにない。

ちなみにドイツにも同じことわざがある。

◎Je tiefer in den wald, je mehr Bäume

15 Хорошá верёвка длинная а речъ корóткая.

ハラショー ヴァイヨーフカ ドリナヤ アリエーチ カロトカヤ

紐は長いのが良い、話は短いのが良い。

「長広舌はロシア人の風土病」とは、同時通訳者として活躍した故米原万里の残した名言であるが、たしかにレーニンからプーチンにいたる政治家の演説はもちろん、ドストエフスキーの小説、ベリンスキーの評論などを見ても、まさにその通りだと納得する。

大国であるロシア人がとかく《重厚長大なもの》を好む傾向があることは否めない。物質的なものはもちろん、精神的なものについても《偉大なもの》《壮麗なもの》《強大なもの》を希求し、また崇拜するのは驚くほどである。

さてロシア人の大演説好きに戻れば、ここに彼女の貴重な体験談があるので紹介しよう。昔あるテレビ局から「ゴルバチョフの演説が10分ほどありますので、同時通訳を」と頼まれ、10分なら一人で対応できるとたかをくくって引き受けたら、延々3時間20分もしゃべられて往生した」そうである。10分の予定が、なんと20倍の200分にふくらんだことになる！

これに類した「雄弁は銀、沈黙は金」という有名なことわざがあるのは言うまでもない。Слово—серебрó, молчáние—зóлото. 雄弁は「言葉」と訳してもよい。

トルストイの『アーズブカ(いろは読本)』では、このことわざは「口にされた言葉は銀、口にされなかった言葉は金」という形で載っている。

ただしこの裏表のことわざに「沈黙は承諾のしるし」Молчáние—знак соглáсия.がある。なおМолчáниеは「ご無沙汰」の意味にもなる。

ついでに、チャーホフの有名なことばも引用しておこう。さすがに短編小説家として鳴らした作家にふさわしい。

◎ Краткость — сестра таланта.

簡潔は才能の妹。この一文はよく「才能の姉妹」сёстры (複数) と訳されるが、「才能」のほうが格が上であり、しかも сестра という単数形なので、ここはやはり「妹」としたいところ。近ごろは英語の場合でも《brother》《sister》(単数) とあるのを、一律に「兄弟」「姉妹」に置き換えて済ます風潮があるようだ。

参考: Brevity is the soul of wit. 言は簡を尊しとなす。[シェイクスピア]『ハムレット』

16 И на нашей улице будет праздник.

チ ナ ナーシュイ ウーリツェ プーヂェト プラズニク

わたらの町にも祭りは来るさ。おれたちのどこにもいつかは運は廻ってくるさ。

《待てば海路(甘露)の日よりあり》 また、次のような言い方もある。

Будет и на нашей улице праздник.

ソ連の政治家スターリンやレーニンは好んでこのことわざを演説で使ったという。逆に言えば、それだけこれは民衆にとって身近なことわざだったという証でもある。そんな場合「希望はやがて満たされる」「目的はいつか達成される」の意味で用いられているようだ。

《и ~》は「~も、また」という意味でよく用いられる。うっかりすると見落としがちなので注意されたい。И она пойдёт. あれ女も行くだろう。

17 Надёлапа синица а море не зажгло. [B]

ナヂェーララ スイニツァ ア モーリエ ニ ザジグロ

シジュウカラ (四十雀) は大言壮語したが、海に火をつけはしなかった。偉そうなことを言うものの、実行できない手合いのこと。《大風呂敷の安請合い》

このことわざはロシア人なら誰でもがよく知っているクルイロフの『寓話』の話から生まれたもの。《四十雀が海へ飛び出して行くなり、この海を焼いてみせると威張って言った。その奇跡を一目見ようと、物見高い連中がわんさと浜辺に押し寄せた。みんな目を凝らして海を見つめている。が、さっぱり、海は燃えない。煮え立ちもしない。四十雀は恥ずかしくて、我が家さして逃げ帰った。「四十雀は評判を立てたが、海は燃えなかったのである」》(「巻1の15: 四十雀」のあらすじ)

日本に生息する同属の鳥は「やまがら」というらしい。四十雀にまつわることわざで

は次のものが有名。сулѣтьはобещать(約束する)と同義。ここでは命令形である。

◎ Не сули журавля в небе, а дай синицу в руки.

空を飛んでる鶴を約束するより、手の中に四十雀を与えよ。明日の百より今日の五十

18 На всякого мудреца довольно простоты. [C]

ナ フジャーガヴァ ムドリツァー ダヴォーリナ プラストウイー

いかなる賢者にも案外愚かな面もある。どんな賢人にもぬかりはある。

《知者も千慮に一失あり》

これはオストロフスキーの戯曲の題名にもなっているが、日本の「弘法も筆の誤り」「猿も木から落ちる」と同様に使われる。ロシアでは「馬は四足でもつまずく」ともいう。

◎ Конь о четырёх ногах да спотыкается. Кóньは牡馬のこと、牝馬はплóщадьと使い分けるのは狩猟、牧畜の民でよく見受けられる。このдаは「しかし、ところが」の意味である。

どちらかといえば、他人が過ちや失敗を犯して、それを弁護してやるときに使われるという。西欧では「ホメロスもときには居眠りする」というが、これは「文豪もときに駄作あり」という意味である。

довóльноは「かなりの、相当の」で、достáточноと同義。名詞だけでなく、不定形をとることがある。ただし、ニュアンスが変わる場合があるので注意が要る。Довóльно спóров.議論は十分だ→もういい。もういらぬ。Довóльно об éтом говорѣть!そんな話はもう沢山だ(やめろ)!

19 Что написано пером, того не вырубшь топором. [B]

シト ナビチナ ビローム タヴォーニ ヴァイルビン タパローム

ペンで書かれたものは斧でも絶てぬ(切り取れない)。

人口に膾炙しているロシア古来のことわざである。ペンで書くことを重く見るとともに「書かれた」言葉である《文書》をごく大切にするのは古くかある慣わしだったらしい。これといわば合わせになっているのは「言葉は雀じゃない、飛び立ったら捕まらない」ということわざであって、《口は災いのもと》ということだが、こちらはむしろ「話された」言葉について言われていると考えていい。

◎ Слово не воробей, вылетит — не поймáешь.

ちなみにロシア語には《крылатые слова翼のある言葉》といって「ことわざ」に近い存在で、よく「故事成句」とか「名句」とか訳される一群の言葉がある。これはもともと出典や作者を特定しうるものであるが、時の経過につれて、しばしばそれらが忘れ

られたり意識されなくなつて、読み人知らずである筈の「ことわざ」の世界に紛れこんだりする。たとえば《*рэвность не по разуму*》「分別なき熱意」(ピョートル大帝のことばより)という名句は「やる気があつても情勢判断を誤てば有害だ」の意である。

さてこの命名(крыло/複 крылья 翼)はあたかも飛ぶが如く口から口へと伝わって広まるためであるが、この表現はギリシアのホメロス(『イーリアス』『オデュッセイア』)に由来する。これをドイツの学者が自ら出版した辞典に《*Geflügelte Worte*》と訳して書名としたことから、ロシアでもこの名称(の翻訳)が用いられるようになったという。

閑話休題。江川卓は「現代でもロシアでは身分証明書など、書かれたものを異常に尊重する慣わしがあり、それがソ連官僚主義の弊害の一つとなっている」と指摘している。

文学の世界を見渡せば、例えばゴーゴリの名作『外套』の主人公アカーキイ・バシマーチキン、周知のごとく、さる役所に勤めるしがない下っ端役人であるが、ゆくりなくも、その職務がほかならぬ清書係であったことがここで思い起こされる。

「アカーキイは仕事に惚れ込んでいたのだ。そこに、その浄書なる仕事のうちに、何か自分だけの、目も綾なす、楽しい世界が見えていたのである。」(『ペテルブルグ物語』船木裕訳/群像社より)

さて、このことわざは英語の「ペンは剣より強し」のさしずめロシア版にあたる(「剣」が「斧」になっている!)のであるが、それと同時に「筆禍は取り返しがつかない」という意味に使うことも多いようだ。米原万里は、自分がプラハのロシア語学校に通っていた時代に経験した、「ペンで書くもの」に対する「ロシア人の特別な思い入れ」について回想している。

それによれば、学童は「正式なノート」二冊と「下書き用のノート」を一冊、交互に教師に預けることになっていた。後者は自分のための心覚えで、鉛筆でぞんざいに書きなぐってもよいが、前者は教師の点検、採点の対象になるもので、必ず「ペン先の付いたペン軸にインキを付けて書き込むべきものであった。(これは)消しゴムなんぞでは消せないで、必ず下書き帳で推敲を重ねた上で、書き込むことになっていたという。

(米原万里『ポタポフ家の陽気な人々』参照)

この記述からは「書かれた」言葉からただよう、なにやらただ事ならざる雰囲気、生々しく伝わってくるのではないか。

20 На бедного Мака́ра все ши́шки ва́лятся. [B]

ナ ビエドナヴァ マカーラ フスイエー ヴァーリヤツァ

かわいそうなマカールに松かさの雨が降る。運の悪い人間は次々とさんざんな目に遭うものだ。《踏んだり蹴ったり》《弱り目にたた目》

このマカールというのは、もともとは伝承上の貧しい日雇い農夫であつたらしい。が、やがて一般的に貧しく、不幸な人間の代名詞となっていく。小説でもコロレンコの《Сон Мака́ра マカールの夢》やドストエフスキーの処女作《Бе́дные лю́ди 貧しき人々》の主人公マカール・ジエーヴシキンなどはそんな意味合いをもっている。

Бе́дный (< бе́да 災難・不幸) という形容詞には「貧しい・貧乏な」と「かわいそうな・不幸な」の二つの意味がある。これは英語の《poor》の場合と似ている。

Куда́ Мака́р теля́т не го́нял マカールが牛を追って行かなかった場所へ。(皮肉に) 人跡未踏の土地へ [追いやる]。という表現もあることを指摘しておこう。

(その2) 終わり